佳作

私の代わりはいない

山形県山形市立第十中学校
三年　海谷　清志郎

「清ちゃん（私）の代わりはいない。一人欠けたら作品にならない。吹部に入ったのならそれを理解してほしい。」

一年生の私に、先輩は泣きながら訴えたのです。そしてこの言葉が、ずっと私を支え、励ましてくれるのです。

私は吹奏楽部に入っています。小学校からトランペットを続けていたので、簡単に言えば、私は調子に乗っていました。いろいろなアドバイスに対し、返事はするものの、我流の練習を続けていました。

そして、入部して初の大舞台であるアンサンブルコンテスト。ほとんどの場合、二年生が複数名でグループを組んで出場します。しかし、オーディションの結果、一年生の私も出場メンバーに選ばれました。

うれしさもありましたが、熱の入った練習についていけず、だんだんやる気を失くしていきました。二年生のトランペットが何人もいるのに、どうして私が出るんだろう。選ばれなかった先輩はどう思っているんだろう。練習をするのも、練習を休むのも嫌になっていました。

ある日とうとう先輩が

「真面目にして。」

と怒りました。情緒不安定になっていた私は、「一年生にこんな曲出来ない。怒鳴ること自体、理解できない。」

と、言い返していました。すると先輩は泣きながら、

「清ちゃんの代わりはいない。一人欠けたら作品にならない…。」

と言ったのです。

もしかしたら、私の代わりはいるのかもしれません。私が出られなくなれば、別のトランペットが出るはずです。でも、先輩は、代わりのきかない、たった一人の存在として私を認めてくれたのです。はっとしました。そして、とてもうれしかったです。同時に、今まで感じたことのない緊張も感じました。

それから私の練習は大きく変わりました。集中して先輩の音に合わせ、自分達のサウンドを追求しました。結果は東北大会四位。惜しくも全国大会には届きませんでした。

アンサンブルコンテストを経験し、吹奏楽の大変さと楽しさを知り、練習に真剣に向かうようになりました。

二年生になると、私は一つの名曲と出合いました。ゾルタン・コダーイ作曲の「くじゃく」という曲です。今でも毎日聴いています。細かな連符から広大なメロディーのある民族的な曲に、私は魅了されました。曲を好きになると、表現の幅が広がっていきました。コンクールでは、東北大会銀賞となり、また全国には届きませんでした。しかし、今の私の音につながる、大切な宝となる演奏ができました。

そして、最後の吹奏楽コンクール。後輩の力を伸ばし、まとめ、全体と調和し、一つの作品を作り上げる。そう意識して練習を続けてきましたが、不安しかありませんでした。果たしてこれで良い結果が出るのだろうか、スポーツと違い正確な力が自分達には全くわかりません。また、別の不安もありました。四月から顧問の先生がかわり、それに伴って外部の指導者も全てかわってしまったのです。

結果は東北大会金賞。またしても全国大会には届きませんでしたが、去年以上、十中吹奏楽部過去最高の成績を収めることができました。本当にうれしくて、本当に惜しくて、涙が止まりませんでした。

これほど吹奏楽に夢中になれたのは、すばらしい仲間、すばらしい先生、すばらしい音楽に出合えたからです。そして、一年生のあの日の「清ちゃんの代わりはいない。」という言葉です。

私たちは何か壁にぶつかると、「私なんかいなくてもいいのではないか。むしろいない方がいいのではないか。」と思うことがあります。でも本当は違います。そう思っているときほど、「あなたの代わりはいない。」「あなたが必要だ。」という言葉を求めているのです。私は、あのときの一言に支えられて、三年間部活動をがんばることができました。そして、自信を失くし、苦しんでいる仲間達を励ますことができたと思っています。

かけがえのない私たち。そして、一人でも欠けると作品にならない吹奏楽。先輩の言葉をこれからも大切にし、高校では今度こそ全国大会出場をはたしたいと思っています。